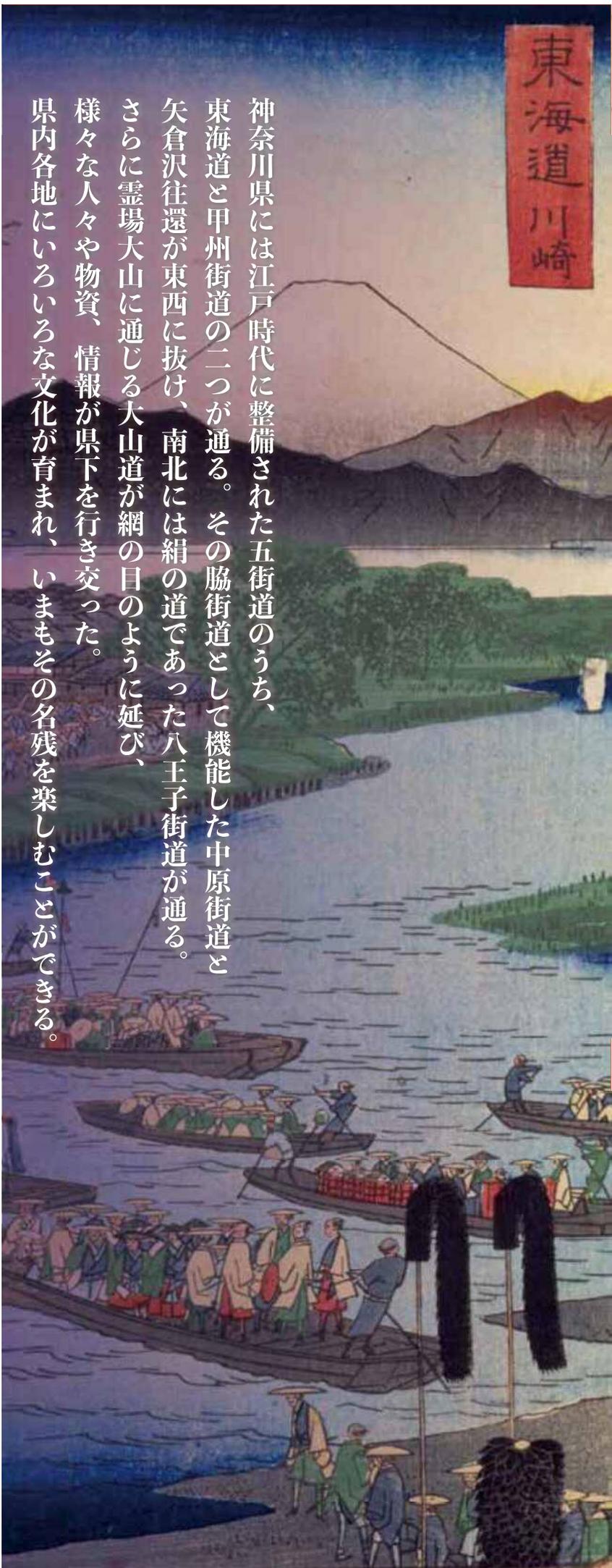


神奈川県には江戸時代に整備された五街道のうち、東海道と甲州街道の二つが通る。その脇街道として機能した中原街道と矢倉沢往還が東西に抜け、南北には絹の道であった八王子街道が通る。さらに霊場大山に通じる大山道が網の目のように延び、様々な人々や物資、情報が県下を行き交った。県内各地にいろいろな文化が生まれ、いまもその名残を楽しむことができる。



第2章

県内を通る 幾筋もの街道と 人々の営み

県南を抜ける日本の大動脈・東海道 箱根をはじめ9宿を有する神奈川県



人物・情報を継いで
いまも続く歴史街道

関ヶ原の戦いで家康が勝利したことによって、東海道は飛躍的に進化した。日本の大動脈となった。

古来、五畿七道の区割り行政に基づき、東海道の各国府をつなぐ駅路や馬屋が設けられていたが、それは近世とは違うルートであった。

関ヶ原の翌慶長6(1601)年、家康は幕府の開設より前に、主な街道の整備強化に乗り出した。「伝馬朱印状」と「御伝馬之定」の交付であり、流通拠点となる宿駅を設け、乗り継ぎ用の伝馬を設置した。これによって東海道宿駅伝馬制が確立したとされ、朝廷や豊臣方の居城がある上方との情報伝達の迅速化や、

名所名物も多い 日本屈指の 観光街道



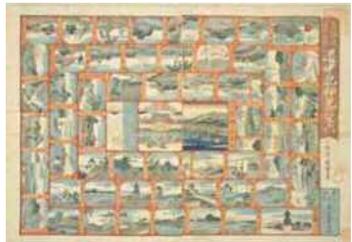
弥次郎兵衛と喜多八の二人が江戸から伊勢詣でに向かう珍道中を描写した十返舎一九作「東海道中膝栗毛」。享和2(1802)年から発行されロングセラーとなった。川崎宿名物の奈良茶飯を食すなど県下の宿場の様子も記されている。挿絵も作者が描いている(国立国会図書館蔵)



県下を通る東海道には、東から川崎、神奈川、保土ヶ谷、戸塚、藤沢、平塚、大磯、小田原、箱根の9宿が並んだ。また、藤沢と平塚の茅ヶ崎や大磯と小田原の二宮(梅沢)などは間の宿として機能した。



一光斎芳盛作「東海道名所風景 箱根」(国立国会図書館蔵)。通行する者たちを厳しく監視した箱根関所だが、事前に通達があった大名などの一行は、不審な様子がない限り検査は受けなかった。



東海道を双六にした一立斎広重作「東海道五十三駅道中記細見双六」(国立国会図書館蔵)。名所名物の多い東海道はまさに双六にピッタリ。たくさんの東海道版双六が残る。

多数の絵師が描いた東海道。特に広重(初代)の「東海道五拾三次之内」が有名だが、そのほかにも広重は右の「東海道五十三次細見図会」も描いている。保土ヶ谷や戸塚、藤沢などの県下の宿場の風景や風俗を写している(国立国会図書館蔵)

幕府役人や各大名の公文書、荷物の運搬の円滑化が進んだ。各宿場では伝馬朱印状を持つ公用の書状や荷物を持つ宿場まで届けるために必要な人馬を用意する義務と負担が課せられ、代わりに税制面などで優遇された。当初は軍用面での色彩も濃く、要所に関所を設け、大石川の架橋を禁止するなどした。その後には始まる参勤交代などによって通行量が増えいくと、宿場設備の拡充、並木や一里塚、道標等の街道筋の整備が進む。世情が安定するにつれ、お伊勢参りなどの庶民の利用も拡大し、東海道は観光ルートとしても発展する。

宿場では、その入口を示す見附や、法制の発布等を知らせる高札場、通行や物流を管理する宿役人が詰める問屋場、公家や大名、幕府役人が宿泊する本陣に一般旅行者用の旅籠や茶屋などがつくられ、街道の運営とともに人や物の流れを円滑にした。県下の東海道には、品川の次の2番目の川崎に始まり、神奈川、保土ヶ谷、戸塚、藤沢、平塚、大磯、小田原、箱根の9宿が設営された。



イタリア人写真家、F・ベアトが撮った東海道(場所不明)。文久3(1863)年に来日し、約20年間日本各地を記録した。当時の東海道の雰囲気かわかる(放送大学付属図書館蔵)



広重作「東海道五拾三次之内 川崎」保永堂版（神奈川県立歴史博物館蔵）。川崎に向かう六郷の渡し舟。岸には荷を積んだ馬が待ち、軒が続く先に雪化粧をした富士も。



平安末期、この地の領主だった河崎基家が山王権現を勧請し開創したのが稲毛神社。「山王様」と親しまれ、明治以降の神仏習合で神社になった。



田中本陣跡。本陣は大名や公家などが宿泊。主人の田中休庵は名主や問屋場も兼ね、六郷の渡船権も譲渡されて宿場を支えた。三角おむすび発祥の地とも。

川崎宿

kanasawaki-yujaku

六郷の渡し付近を撮った古写真。川崎は重工業都市の印象が強いが、元は東海道の宿場であった（神奈川県立歴史博物館蔵）

六郷の渡しを越えて 行き交う人馬の足音

慶長6（1601）年に東海道の駅制が確立した。それに遅れ、元和9（1623）年、東海道五十三次2番目の宿として川崎宿は開場する。往復10里に及ぶ品川宿と神奈川宿間の伝馬（交通・通信手段）の負荷軽減が目的であった。

江戸方面からの玄関は川辺である。六郷川（多摩川）を越える「六郷の渡し」から川崎宿は始まり、街道を抜ける旅人はもちろん、宿場の東に位置する川崎大師への参詣客を迎え入れて大いに栄えたという。

渡しには米領事のハリスや皇女和宮も寄ったという茶屋の万年屋や、さらに入ると田中本陣、佐藤本陣、高札所、問屋場、助郷会所などが軒を連ね宿場の核をなした。

寺社も点在し、稲毛神社には樹齢千年以上という大銀杏があり、宗三寺には飯盛女の供養塔が立つ。

現在、旧街道の一部で電線類が地下化され、ガイド表示も充実。往時の宿場に思いを馳せながら散策することができる。



東海道かわさき宿交流館は川崎宿の歴史や文化を深く知ることができる新しい施設。コンピューター映像や模型などを通じ当時の川崎宿がイメージできる。



六郷の渡し跡には川崎大師の灯籠や、明治元（1868）年の明治大帝東下の際に、23艘でつくられた船橋を渡ったことを記念する碑が立っている。

神奈川宿

kanagawa-yujaku

SPOT



立ち寄り所

田中屋

海に臨む神奈川宿でも高台にあった合町は眺望がよく、旅館や茶屋が並んだ。居並ぶ店の中でも営業を続けるのが田中屋だ。西郷隆盛と高杉晋作が倒幕の計画を練り、明治には坂本龍馬の妻おりょうも働いたという【住所】横浜市神奈川区台町11-1【電話】045-311-2621、完全予約制 <https://www.tanakaya1863.co.jp/>



昔の神奈川宿の辺りを撮った写真（神奈川県立歴史博物館蔵）。いまでは街並みは変わったが、随所に当時の面影を残し、神奈川区では「神奈川宿歴史の道」としてガイドパネルを要所に設置。それを追いながら散策が楽しめる。

広重作「東海道五拾三次之内 神奈川」保永堂版は、現在の青木橋付近から、当時の海であった横浜駅西口方向を描いたもの。対岸は、制作された天保4（1833）年頃にはまだ漁村だった横浜村になる（神奈川県立歴史博物館蔵）



神奈川台の開門跡。開港後に外国人の経緯事件が度々発生し、各国らの非難を受けて幕府は、神奈川宿の東西に開門を設置した。西側の神奈川台開門跡には碑が立っている。



幕府が藩が発令した法度や掟などを記した札を掲げた高札場（復元）。人通りの多い街道に設けられ、目につくよう間口が5m、高さが3.5mと大きかった。



神奈川の大井戸、通称「お天気井戸」。宗興寺境内にあった井戸で水量が増すと天気がよくなくなるといわれた。東海道の名水として知られた井戸。

開国の波しぶきを あびた海に臨む宿場

東海道五十三次3番目の神奈川宿は、東が海に臨む風光明媚な宿場であった。

現在の神奈川本町を中心として横浜西口付近に及ぶ大宿で、街道の両脇には旅館や家々が軒を連ねた。

隣接する神奈川湊は鎌倉時代が開かれた要港である。江戸をはじめ房総半島や三浦半島などと結び、人や物が行き交う水上交通の要衝であった。相州武州を後背地に、幕府管轄のもと宿場は発展した。

安政5（1858）年の日米修好通商条約が神奈川沖に浮かぶポーハタン号上で締結され、宿場周辺の寺院には、本覚寺の米領事館をはじめ各国の公使館が置かれた。

神奈川湊の開港も約束されたが、幕府は日本人と外国人との衝突軋轢を懸念し、本牧岬の出洲の横浜村に港を整備、外国人居留地を設けた。幕府が江戸にも近い神奈川宿を重要視したからで、いまま陣屋跡や開門跡、現存する料亭田中屋にその繁栄ぶりを垣間見ることが出来る。



広重作「東海道五拾三次之内 戸塚」
保永堂版では柏尾川に架かる大橋が描かれていた。橋の袂にある茶屋の「こめや」前には鎌倉道の道標が。この面に描かれたものではないという道標が近くの妙秀寺に保存されている（神奈川県立歴史博物館蔵）



戸塚宿の二大本陣の一つであった澤邊本陣跡。明治天皇が明治元（1868）年に東下した際には行在所となった。



戸塚宿の江戸方、国道1号線の柏尾の不動坂で東海道と分岐し、大山に向かって道が延びる。その迫迫には不動堂が建ち、旅人を大山へと誘った。



柏尾川に架かる吉田大橋は長さが8間（14m）という長い橋であった。現在は大名行列が持つ毛槍を模した街灯や浮世絵を写したパネルが設置されている。



八坂神社では7月に女装した男が歌いながら町を歩き舞う「お札まき」が。江戸中頃に始まり、江戸や大坂にもあったそうだがいまでは戸塚だけに残る。



源頼義・義家父子が前九年の役で奥州下向の際に創建した富塚八幡宮。富塚彦命の古墳という場所に建立され、富塚と呼んだのが戸塚の地名の由来。

戸塚宿

Utsunohara Station



金沢橋丁に立つ4基の道標。東海道と金沢道の分岐点で、「程ヶ谷の枝道曲がれ梅の花」と詠われたようにここから人々は杉田梅林や金沢へと向かった。



日本橋より9番目となる品濃一里塚は、境木地藏尊から焼餅坂を下ったところ。左右一対の塚が残るのは県下ではここだけで、付近には旧道の面影も。



国道1号線沿いに残る戸部本陣跡。現在は通用門だけとなったが、建坪270坪で、部屋数も18と東海道屈指の規模。明治になり表記ミスから軽部に改姓。



帷子橋を撮った写真（神奈川県立歴史博物館蔵）。東海道の橋が少なかったこともあり北斎や広重らが絵の題材にした。河川改修で川の位置は変わった。

保土ヶ谷宿

Hodogaya Station

SPOT

立ち寄り所



宿場そば桑名屋

JR保土ヶ谷駅近くに建つ明治19（1886）年創業の蕎麦屋。手打ちの八割蕎麦がいただけるほか黒船カレー・南蛮も。由来は幕末の志士たちが黒船を見て、保土ヶ谷宿から金沢道経由で浦賀に行ったり、横浜へ向けて歩みを進めたりしたからとか【住所】横浜市保土ヶ谷区岩井町21【電話】045-331-0233【開店】11:00～22:00、木曜休み <http://www.1616sagasu.com/seven/122/party/33>



広重作「東海道五拾三次之内 保土ヶ谷」保永堂版では宿場の東、江戸方口近くを流れる帷子川に架かる橋が描かれている。旅人や駕籠が渡り、その先には一八蕎麦屋の看板も（神奈川県立歴史博物館蔵）



相武国境にあった難所の前にひと休み

東海道の難所といわれた権太坂に続く坂路をひかえた、東海道五十三次4番目の宿場が保土ヶ谷宿だ。日本橋より八里九町（約33キロ）のところに位置する武蔵国最西端の宿で、坂を越えると相模国となる。芝生村より江戸方見附を越え、橋を渡ると宿場内。この帷子橋は北斎や広重が浮世絵の題材として描いた保土ヶ谷のランドマークであった。

宿場は保土ヶ谷、岩間、神戸、帷子の4町で構成され、保土ヶ谷町には本陣、名主、問屋の三役を拝命した荏部（軽部）氏が営む本陣があった。いまも国道1号線沿いにその跡があり、近くには脇本陣跡も残る。保土ヶ谷にはまた金沢道などの分岐点があり、その道標も現存する。武州と相州の国境に建つのが境木地藏尊だ。当時、茶屋が並び名物の牡丹餅が売られていたという。ここは、坂を上りきり、神奈川の海や富士山の遠景を望みながら旅人がひと息ついた場所、下るといまでも往時の姿を留める品濃一里塚となる。

早朝に江戸を立立しその日投宿した戸塚

東海道五十三次5番目の戸塚宿は、慶長6（1601）年の東海道宿駅伝馬制開設に3年遅れて開かれた宿場である。保土ヶ谷宿と藤沢宿の間が長いことに相まって、品濃坂や大坂の難所があったことが開宿の理由であった。日本橋より10里半（約42キロ）で、江戸を七つどき（午前4時頃）に立立すると、戸塚はその夜の宿泊地として最適だった。大山や鎌倉への分岐点としても栄え、旅籠数も盛時には75軒あったという。県内では小田原に次いで2番目の規模である。

柏尾川に架かる大橋は、安藤広重が描き名所となったところだ。宿場内には3カ所の問屋場があり、澤辺と内田の2大本陣がその要となった。

澤辺本陣近くに鎮座する富塚八幡宮は、戸塚の地名の由来にもなった社である。「お天玉さま」として親しまれている八坂神社とともに戸塚宿の鎮守として街道を行き交う人々を見守っていた。

17世紀後半に設置された江の島への道標。道沿いには10数基が伝わる。藤沢にはこのほかにも鎌倉道や八王子道、厚木道が通り人や物が集まった。



源頼朝の命で弟義経を弔い祀ったのが白旗神社。白旗は源氏の印。もとは寒川比古命の分霊を祀る寒川神社だったが、義経も合祀されたという。



義経の首は実検後に片瀬の浜に捨てられたという。その後、汐に乗って境川を上り付近に漂着。地元民によって葬られたという「伝義経首洗い井戸」。



遊行寺として名が通る清浄光寺は、踊り念仏の布教で知られる一遍上人が開いた時宗（浄土教一宗派）総本山。正中2（1325）年に遊行四代香海上人が廃寺を再生し創建した。浄瑠璃や歌舞伎の題材となった小栗判官照手姫伝説でも知られ、観光の人気地だった。境内には樹齢700年ともいう大銀杏が。寺宝を展示する宝物館も。

天保14（1843）年には旅籠は45軒だった。遊行寺の門前町として定期的に市も立ち賑わったという。
 天平期（729〜749）より記録に残る藤沢。数々の神社や史跡が伝わるが、なかでも白旗神社は源義経が平泉で戦死した後、鎌倉で首実検され、不思議なことにこの地に流れ着き、そして祭神として祀られたといういわれ。
 遊行寺にある敵御方（味方）供養塔は上杉禪秀の乱の後、時の遊行寺住職によって応永25（1418）年に建てられたもので戦乱の世をいまに伝える。
 感応院は建保6（1218）年の建立と遊行寺より古い。浄土真宗永勝寺の旅籠屋小松屋の墓域には飯盛女の墓碑が並び、宿場の夜に咲いた女の悲哀を感じさせるなど歴史ある藤沢宿は、江戸時代後期になると地域の産物の流通の中継地となり、ますます繁栄した。幕末には打ちこわしや「ええじゃないか」が起こったというが、街道筋ゆえ、時代の流れにも敏感だったからだろうか。

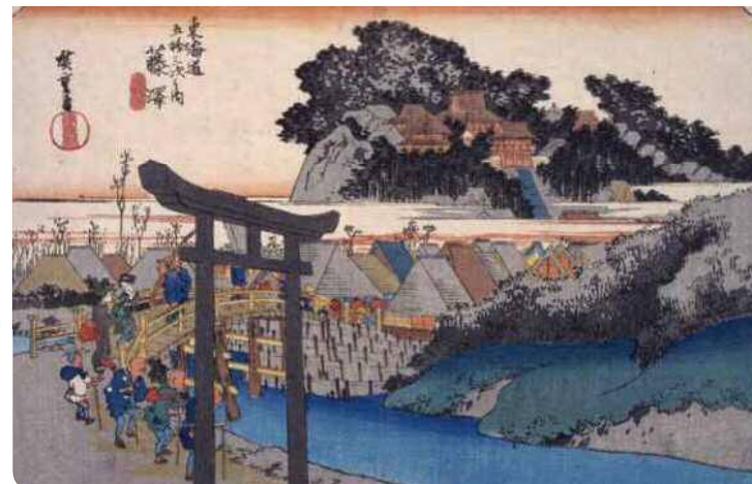
S P O T

立ち寄り所



さつまや本店

藤沢の老舗寿司屋の板長が魚介のさばき方から握り寿司や軍艦巻などのつくり方を教えてくれる。約30か国からの外国人も受講した人気プログラム【時間】15:00〜18:00【住所】藤沢市藤沢1-3-6【電話】0466-23-2487【料金】大人7000円 申込み、詳細は神奈川チカタビで。http://tabihatsu.jp/chikatabi/program/90690.html



広重作「東海道五拾三次之内藤沢」保永堂版では、宿場内を流れる境川に架かる大鋸橋橋袂にあった江の島弁財天ノ鳥居が描かれている。背後に遊行寺が見え、橋上には大きな木太刀を担いだ大山詣りの人々も。大山の男神と江の島の女神をあわせて参詣すると縁起がいいとされていた（神奈川県立歴史博物館蔵）



平成28（2016）年にできた最新施設の交流館。各種イベントも随時開催【電話】0466-55-2255 http://www.fujisawa-kanko.jp/fujisawashukukouryukan/



藤沢宿の歴史や文化を紹介し、人々の交流の場を提供する「藤沢市ふじさわ宿交流館」。藤沢宿を再現した模型など東海道や宿場に関する資料を展示。



広重の東海道五拾三次の絵と同じ構図で撮った写真（神奈川県立歴史博物館蔵）。大鋸橋は現在、遊行寺橋と称す。江の島弁財天の鳥居は見えない。

藤沢宿

Fujisawa-yakuba



大山寺本尊の不動明王を安置した道標。延宝4（1676）年の建立。風雪で朽ちた道標も多いが四ツ谷の不動明王は人々から守られ保存状態がいい。



藤沢宿の西、四ツ谷の立場（茶屋もあった休憩所）には東海道から大山道への起点が。鳥居が立ち、不動明王を乗せた道標を納める不動堂が建つ。

江の島道などをつなぎ 門前町として賑わう

東海道五十三次の駅伝馬制が始まるよりも前に藤沢は、時宗総本山遊行寺（清浄光寺）の門前町として栄えていた。
 北条早雲に始まる後北条時代は、小田原城と支城の江戸城や八王子城、玉縄城を結ぶ小田原街道の分岐点として、後北条氏の関東支配の拠点ともなっていた。

後北条氏滅亡後、徳川家康が関東に入ると、藤沢には御殿と陣屋が置かれ、関東支配の地盤が固められた。東海道五十三次6番目の宿場に定められ、大山詣りや江の島詣での分岐点もあるなど、交通の要衝として藤沢は発展する。宿場内に立つ、江の島弁財天一番目の遙拝鳥居や大山への鳥居が、その道案内役を担った。日本橋より12里半（約50キロ）。遊行寺東門横の江戸方見附から現在の小田急江ノ島線を越えた西側の上方見附までの12町17間（約1・3キロ）の間にある、大鋸町、大久保町、坂戸町で宿場は構成された。
 本陣は時田本陣と脇本陣があり、



広重作「東海道五拾三次之内 大磯」保永堂版は、仇討ちの果てに命を落とした曾我十郎と虎御前の悲恋がモチーフ。その命日の陰暦5月28日に虎御前が流した涙が雨になったという。しとしと雨が降る中、人馬が宿場の軒並みに足早に入る。松林の向こうからは波音も（神奈川県立歴史博物館蔵）

S P O T

立ち寄り所



井上蒲鉾店本店

明治11(1878)年に創業した老舗。大磯以外に店はなく、遠方からもわざわざ買いに来るお客が。日本中でここにしかないと称されたはんぺんやイシモチだけでつくったかまぼこ、揚げたてのさつまあげが看板商品。大磯土産にいい【住所】中郡大磯町大磯1306【電話】0463-61-0131【営業】8:30~17:00、水曜休み <http://oiso-inoue.com/>



大磯宿

Oiso-yakushi



古代の東海道も抜けた大磯は古くから開けていた。海沿いに東海道が整備されると人家も移転し、新たな宿場町が形成された（神奈川県立歴史博物館蔵）



江戸方から見て大磯宿の手前に緩やかに続く化粧坂。その両側にはいままも松林が残る。家康は沿道に松や杉を植えて旅人を風雨、日射しから守った。

大磯最大の小嶋本陣跡。天保7(1836)年の大火で他の本陣ともに焼失したが再建し、明治元(1868)年の明治天皇東下の際には行在所となった。



高麗山には江戸時代まで、徳川家からも崇敬された高麗寺があった。高麗神社も鎮座したが、明治の廃仏毀釈で神社が残り、その後、高来神社と改称した。



平塚八幡宮は、この地を襲った大地震に苦しむ人々を見かねた仁徳天皇が国土安寧を祈り、応神天皇を祀ったのが起源とされる（写真提供：平塚八幡宮）



加藤本陣は表間口16間半、奥行38間で表門と表玄関を備えた。脇本陣は本陣の補助をしたが、特権階級の宿泊がなければ庶民も泊まれた。



復元された平塚宿の江戸口見附。各宿場の両端には見附が設けられ、江戸側を「江戸見附」、京都側を「京方見附」や「上方見附」などと呼んだ。

平塚宿

Hiratsuka-yakushi



相模川流域の自然と文化がテーマの平塚市博物館。平塚宿に関する展示もあり、文久2(1862)年の資料をもとに200分の1で宿場を再現した模型も。



江戸時代の怪談話「番長皿屋敷」の主人公お菊にちなんだ塚。お菊は平塚宿の役人の娘だったというが、泰公に出た先で無実ながら非業の死をとげた。

S P O T

立ち寄り所



旧横浜ゴム 平塚製造所記念館

日本火薬製造が明治40(1907)年頃より平塚で火薬を製造。その後、海軍が買収し火薬廠とした。戦後の米軍接収後、横浜ゴムに払い下げられたが市に無償提供され、記念館として一般に公開。イベントなどで利用されている。国登録有形文化財【住所】平塚市浅間町1-1【電話】0463-35-7114【開館】9:00~21:30、月曜休館、無料 <http://hiratsuka-yokan1906.jp/>



広重作「東海道五拾三次之内 平塚 保永堂版」ではくねった幡手道（道）の街道が描かれている。松が点在し、前方にはお菊を伏したような高麗山が。後ろに富士が少し見え、丹沢の山が右にそびえる（神奈川県立歴史博物館蔵）



東に相模川を臨み 西に高麗山を抱く

松並木が続く先に丸々とした特徴ある高麗山がそびえる。右手には丹沢と大山を望み、遙か向こうに富士が白く光っている。

このような光景を眺めながら、江戸方面からの旅人は東海道五十三次7番目の平塚宿に入った。9町5間(約1キロ)、東西に真っ直ぐ伸びた道に沿って江戸方見附より、十八軒町、二十四軒町、東仲町、西仲町と続き、その間を旅籠などが軒を連ねた。寛永12(1635)年に参勤交代が制度化されると通行量は激増し、東側に隣接する八幡村の一部を平塚新宿として加増した。東西の間屋場が2カ所、加藤本陣に山本脇本陣、高礼場も置かれ、宿場は機能した。宿場内には平塚八幡宮や、宿場の鎮守として街道を見守る、北条政子安産祈願の春日神社や地名由来の塚の碑近くにある要法寺などが建つ。「あの山を越えねば大磯へはいけない。ちよいとお泊りよ」と、宿泊客が少なかった平塚宿では留女が偽って旅人を引き留めたという。

ゆるれる松並木と波音の二重奏が心地よい街

広重が描いた大磯宿には「虎ヶ雨」の副題が。その由来は、鎌倉時代の曾我十郎(仇討ち話で知られる曾我兄弟の長兄)と遊女虎御前の悲恋物語で、宿場内に建つ延台寺には「虎御石」の伝説が残る。高麗山麓の高麗寺(現・高来神社)門前にはかつて遊里があり、東海道宿駅制成立以前から賑わっていたという。やがて江戸時代になると大磯は東海道五十三次8番目の宿となり、いまでも一部が残る松並木などが整備された。

11町52間(約1.3キロ)の道筋には江戸方より、山王町、神明町、北本町、南本町、茶屋町、南台町と並ぶ。66軒の旅籠と三つの本陣、北組南組二つ間屋場で宿は稼働した。小田原寄り、街道に臨む位置に鎮座する六所神社は、後北条氏や徳川の歴代将軍から崇敬を集めた相模国の総社である。千年の歴史を誇る相模国6社の御輿が勢揃いする「国府祭」が毎年5月、古式にのっとり行われている。



海からの恵みと箱根丹沢水系の良質な水が小田原名物のかまぼこを生んだ。船方村と呼ばれた旧街道筋には店が軒を連ね「かまぼこ通り」と呼ばれる。



外国人旅行者が投稿した SNS から話題となった「魔法の窓」。西湘バイパス下のトンネルを抜けたと青い大海原が。感動した外国人が名付けたという。



新鮮な魚介を提供する飲食店や土産物店が並ぶ小田原漁港。伊東や真鶴、大磯など相模湾周辺の漁場から1600種の魚類が集まる地域の核となる漁港。

後北条時代に築かれた日本最大級の城郭を活かし、江戸時代の城主大久保氏が近代城郭に発展。宝永期(1704~1711)の天守閣が復興された小田原城は地上38.7m、3重4階の天守に付櫓、渡櫓を付けた複合式天守。マニアからの人気も高い。



SPECIALTY

名物



小田原の名物と街かど博物館

小田原には歴史を誇る名物が多い。梅干しは旅人の携帯食として愛用され、銘菓の甘露梅は安政年間の考案。小田原提灯も旅人に人気で、木目の美しさを活かした小田原漆器は室町時代中頃から続く。その他、かまぼこや漬け物、ひものなども伝統産業

だ。市内20店舗ほどが「街かど博物館」として、それぞれの商品や店の歴史を紹介する展示コーナーを設け、一部では、ひものさばき作業やかまぼこづくり体験なども。小田原宿なりわい交流館でも小田原ちゃんちの製作体験ができる。



小田原宿

Odawara-yakushi

広重作「東海道五拾三次之内 小田原」保永堂版は富士山麓を源とする酒匂川の渡しが題材。川渡し人足4人で担ぐ平置台や大人数で担ぐ大高置台が川を渡る様子を描いている。遠くに見える宿場の街並みと小田原城。さらにその後ろに箱根の険が隆として旅人を待っているという図(神奈川県立歴史博物館蔵)



小田原宿なりわい交流館は関東大震災後に再建した網問屋の建物をリニューアルしたもの。市民や観光客憩いの場として開放。畳の筒もあり、靴をぬいでくつろげる。



駅前通り商店街のアーケード天柱には三つ鱈(後北条氏や阿部鷹の羽・阿部氏、大久保氏、大久保氏)など、小田原城歴代城主の家紋が並ぶ。



JR小田原駅天井には大きな提灯が。江戸中期に考案された小田原提灯は、折れたため胴軀がはがれにくく丈夫で強い旅人の必修グッズだった。



酒匂川は富士の雪解け水も加わる春から夏、しばしば氾濫した。西からの旅人は小田原に、東からの旅人は大磯や二宮に投宿し水が引くの待った(神奈川県立歴史博物館蔵)

名物や名産品が多い 街道一の規模を誇る宿

小田原城に小田原提灯、小田原攻めや小田原評定やかまぼこ梅干しなど、小田原で連想するものは多い。それだけ歴史があり、日本人の心にも刻まれている証であろう。

箱根の険を背にした東海道9番目の宿場・小田原は、後北条氏の拠点として街づくりがされ発展した。居城は東海道北側にそびえる八幡山を利用し、幾層もの曲輪が築かれ、大規模な空堀と土塁で囲まれた。戦国時代最大の城であったが、江戸時代に城の中心が山側から街道側に移り、幕府の防衛拠点として睨みをきかす。

宿場町としても東海道一の規模を誇り、江戸口見附(山王口)より、新宿町、万町、高梨町、宮前町、本町、中宿町、欄干橋町、筋違橋町、山角町の9町が並び、青物町や大工町などの脇町を含め、上方口(板橋口)までの東西20町5間(約2.2キロ)、南北9町5間(約990メートル)の間に大きな街並みがつくられた。日本橋より20里20町(約81キロ)

に位置し、人々は西の箱根を越える前、あるいは、東の酒匂川を渡る前に小田原に投宿し、明日の旅程に備えたという。それもあって、旅人向けの土産物屋や食事処、日用品や生鮮食料品を扱う商家も活況を呈したとのこと。いままかまぼこなどをつくる老舗が観光客の目をひく。後北条以来の伝統を引き継ぎ、ほかに鋳物や塗物、木工品などが名産品となっている。

宿場は町奉行の管轄下、後北条以来の上級町人の町年寄によって運営された。清水、久保田、片岡の大本陣は町年寄も兼務し、宿場の行政を司った。物流拠点の間屋場は、宿場の両入口付近に2カ所置かれ、周辺79カ村を助郷として、交通手段(人馬)の強固なバックアップ体制を確立し、参勤交代などをスムーズに運行了させた。

松原神社は後北条時代より小田原の総鎮守的存在で、いまも盛大な大祭が行われている。大久保氏は藩主・大久保家の菩提寺であり、春日局の創建といわれる光円寺の大銀杏は現在も旅人の目を楽しませている。



芦ノ湖に臨む箱根関所。箱根宿開場と同時に隣接して設置され、江戸への入出を厳しく監視した。笠や頭巾は取り、顔かたちを確認し、乗り物の旅人は扉を開けて中をチェックした。大名行列でも不審者がいれば審査したという。



箱根宿を撮った明治の写真。東海道を挟んで家々が連なり、遠くに恩賜箱根公園も望める。関所のあった箱根も外国人たちが避暑に訪れる観光地になるようになっている頃の写真（長崎大学付属図書館蔵）

元箱根から恩賜箱根公園までの旧街道沿いに約500mの杉並木が続く。川越城主・松並正綱の植林といわれる。400本を超える樹齢約400年の杉が並び、藝者としての狹田宗元、



山岳信仰の霊山である箱根芦ノ湖畔に、天平宝字元757年、万巻上人が箱根神社を創建。源頼朝をはじめ北条氏や徳川家康などの武将の崇敬を集め箱根権現として敬われた。



毎年11月3日の文化の日に参加交代の大名行列が再現され、百数十人が旧東海道を練り歩き、昭和10（1935）年の箱根観光電燈会とともに旅館経営者たちの呼びかけで始まった。



茅葺屋根の民家を移築し無料休憩所とした箱根旧街道休憩所。隣接して、江戸初期に創業した甘酒茶屋が建つ。いまも変わらない味の甘酒が名物。旧東海道石畳もすく、



SPECIALTY

名物

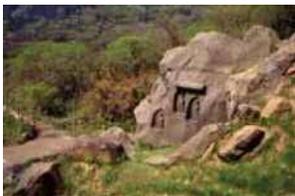


箱根寄木細工

箱根寄木細工は、箱根の豊富で多様な木材の質や木目などの個性を活かしながら、精緻に寄せ合わせた木工芸品である。江戸時代から続く技術が継承され、からくり付きの秘密箱は土産としても人気が高い。箱根駅伝往路優勝チームには寄木細工のトロフィーも贈呈される。「かながわの名産100選」の一つ。



厳密な遺跡調査をし、平成19（2007）年に往時の姿を再現した箱根関所【開館】9:00～17:00、年中無休【料金】一般500円 <http://www.hakonesekisyo.jp/index.html>



精進池の畔に54基の石仏や石塔が点在する元箱根石仏群。中世の箱根越え、湯坂道の通る寂寥とした場所で、鎌倉時代後期につくられた。

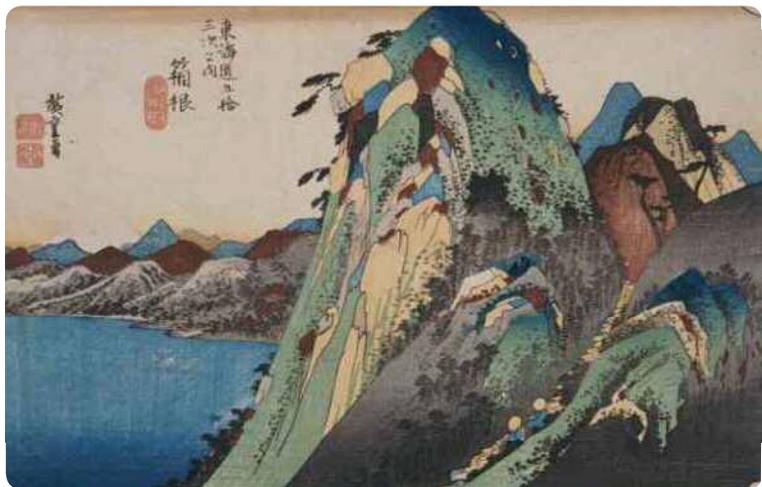
箱根宿



小涌谷の蛇骨川上流の奥深いところに潜む千条の滝。高さ3m、幅20mの岩盤に糸の如く幾筋にも分かれ清流が落ちる。7月にはゲンジボタルも飛び交う。



東海道宿駅伝馬制が始まり、のちに石畳が敷かれた箱根越えは現在も一部に石畳が残り往時の旅人気分浸れる。特に元箱根～畑宿の約7kmのハイキングコースが人気。



広重作「東海道五拾三次之内 箱根」保永堂版には、山あいには大名行列のようだが、天下の険を越えてきたせいどころか疲労感も（神奈川県立歴史博物館蔵）

東海道随一の難所 天下の険を擁する

東海道五十三次10番目の宿の箱根は、計画都市ならぬ「計画宿場」であった。宿場は芦ノ湖畔の人の住まない荒れた原野に新設された。「箱根にも宿場を」という、街道最大の難所、箱根の山越えの不便さの解消を求める西国大名の声を受け、幕府は元和4（1618）年に小田原と三島の間に宿場を設置した。

当初は箱根権現（箱根神社）の門前町である元箱根を宿場にしようとしたが、本陣の提供を拒まれて断念。現在の箱根町箱根に変更した。

原野だったため、小田原と三島の宿場からそれぞれ50戸（約600人）を強制的に移住させ、見返りとして税制を優遇したが、それによって小田原藩管轄と三島代官所管轄の両方が混在する宿場となった。

日本橋より24里35町（約98キロ）で、本陣が6軒に脇本陣が1軒、旅籠が36軒の規模だった。標高は700メートルを越え、東海道でもっとも高所の宿場町となった。「入り鉄砲に出女」という、銃火器

の江戸流入と西国大名子女の江戸逃亡を防止することも知られる箱根関所。大坂夏の陣による浪人流入防止のために箱根権現脇に置かれたこのことだが、宿場新設と同時に芦ノ湖畔に移動したという。幕藩体制の強化の一助となったもの、お玉が池にまつわるような悲劇も生んだ。道の整備が図られ、箱根八里越えのルートが構築された。古来の足柄道や湯坂道にとって変わり、湯本の三枚橋から湯治場に続く七湯道と分けられた。

須雲川溪谷に沿って登り、畑宿を経由し二子山を眺め、芦ノ湖畔の宿場に向かう。榎木坂、猿滑坂、追込坂などの険しい坂道が続くが、途中に13軒の甘酒茶屋があり旅人たちを癒したという。

畑宿は「間の宿」で、茗荷茶屋が建ち大名などの休息の場となった。道には当初、箱根竹が敷かれたが、延宝8（1680）年頃より石畳を敷き旅人の足元を固めた。「昼なお暗き杉並木」と唱歌で歌われる杉も沿道に植えられ、いまも旅人を見つめている。

中原街道、金沢道 矢倉沢往還など 人や物が行き来した道

脇街道

わきかいどう



東海道の保土ヶ谷宿の金沢横丁に伝わる道標。道の分岐点に立ち、人々を案内した道標は県内各地に残る。



北斎の『富嶽三十六景』の一つ「相州仲原」。現在の平塚市中原で、富士の直前に大山が描かれ、巡拜者らしき親子の姿も。中原は東海道から分かれ、内陸部を抜けて江戸と結んだ中原街道が通ったところ。人の往来も多かった（神奈川県立歴史博物館蔵）



北斎が「相州仲原」で描いた場所というところにはその記念碑が立つ。かつては画のように川が流れていたという。付近には昔ながらの道も残り、ここから13kmほどのところに大山がそびえる。



16世紀末から17世紀中頃まで家康などが利用した中原御殿跡。江戸と駿府を行き来したり鷹狩したりするためにつくられたという。北斎の記念碑が立つ場所から北西に600mほどのところ。



神奈川県は東西に五街道の東海道と甲州街道が抜け、また、それぞれの脇街道が通り、南北に各街道をつなぐ道が走った。多くの人や物が行き来し、まさに関東の交通の要の地である。

「脇を固める」―映画や演劇などでは、脇役にいかに卓越した役者を揃えるかが肝要と聞く。

江戸時代の道の主役たる五街道も、脇街道（往還）があればこそ、幹線道路として効果的に機能した。いわば動脈から分かれて体内の隅々まで

となった大山詣りもその例である。

江戸からの参詣ルートとして賑わった道が矢倉沢往還だ。万葉の時代より東国と畿内を結んだ道で、家康が整備する前の東海道でもあった。大山街道とも呼ばれ、物産の輸送路としても利用された。大山へは八王子や府中などの各所から道がつながり、それを称して大山道と呼んだ。県内にはその他にも、江の島弁財天や川崎大師などの聖地があり、それらに通じる道を多くの人が行き来し、治道は賑わった。

東海道の脇街道として機能したのが中原街道である。平塚の中原から寒川、瀬谷、小杉を経由し、江戸に向かうほぼ直線に進む道だ。小田原北条氏のときに整備された軍事的な面もある道で、家康が入府する際にはこの道が利用され、その後も駿府と江戸の往復に使われている。

栄養を運ぶ血管のようなものであった。

神奈川県内には鎌倉街道や矢倉沢往還、中原街道、金沢道などの脇街道が縦横につながり、人々や物資を運んだ。それぞれ歴史は古く、家康の五街道整備よりも前に開かれた道も多い。

鎌倉街道は「いざ鎌倉」のルートで、地域の人々の生活道路も兼ねていた。鎌倉への出入口となる七口の切通をはじめ、幕府は各地を結び、有事の際に武士たちが駆け抜けられるように道を整備した。

観音信仰に深く帰依した頼朝は西国三十三所にならうと、関東にも巡拜の道を開こうと考えたという。鎌倉時代初期に坂東三十三観音霊場が開設され、鎌倉の二階堂に建つ杉本寺を一番礼所として、関東を時計回りに囲む1300キロの巡礼道がつくられた。道の発展と巡礼は関係が深い。江戸時代中期以降に盛ん

中原街道は相州の農作物を運ぶ流通路としても活躍した。特に平塚特産の酢を運んだことで「御酢街道」とも呼ばれた。街道沿いの宿場は東海道ほど大きくはなく、強引な客引きなどに煩わされることがないことから、歩みを進める旅人のための早道ルートとしても人気だったとのことだ。金沢道は保土ヶ谷と風光明媚な金沢八景を結び、江戸時代には多くの文人墨客が歩いたという。近隣には鎌倉や江の島が控え、まさに観光街道であった。

県内には金沢道のように南北に走る道がいくつかあった。府中街道や八王子街道などだが、八王子街道は明治時代に横浜港へ生糸を運ぶシルクロードとして活躍する。その八王子を通る甲州街道も抜ける神奈川県。聖地や観光地も多いまさに交通の要衝であり、脇街道が人や物の流れを円滑にさせた。